

ホテルに着き、シャワーを浴びてベッドに入ったのは十二時近く。ここは日本海に面した韓国東北部の都市ソクチョ。ソラク山国立公園があり、韓国人に人気のリゾート地だ。

私は目がさえて、なかなか寝付けなかった。一年前を振り返ると、遠いこの地まで来られたことが夢のように思われた。隣のベッドでは、この旅に誘ってくれた親友のフミ子が軽やかな寝息を立てている。高校の英語教師のフミ子は、四十代半ばでカナダの大学院に留学した。その時ホームステイした家の息子マイクとは（歳は親子ほど離れているが）、姉弟のような間柄だという。彼は二年前からソクチョの英会話学校の先生をしており、フミ子に、夏休みにソクチョに来ないかというメールを寄越した。それで彼女が私を誘ってくれたのだ。その気持ちはうれしかったが、私は旅に出る自信がなかった。

四年前に夫の単身赴任が始まり、私は二人の息子の子育てと仕事の両立で一杯だった。そこに、ひとり暮らしの父の認知症が重なり、気が休まる時がなかった。父がホームに入所し、夫の単身赴任が終わった一年前、私は心身の不調を来し、眠ることも食べることも出来なくなって、うつ状態と診断された。三ヶ月ほどの療養で回復したが、一年たっても体調には波があり、疲れ過ぎると眠れなくなる。闘病中の私をずっと支えてくれた彼女は、全てを承知で誘ってくれている。でも、旅の途中で具合が悪くなって迷惑をかけたらと思うと躊躇してしまう。

そんな気持ちを彼女に打ち明けると、  
「とにかく行ってみない？もし具合が悪くなっても気ままな旅だから何とでもなるよ」

おおらかな彼女の言葉に背中を押され、旅に出たのは八月の上旬だった。

ソクチョでの初めての朝は快晴。マイクが、休暇を取り、車で迎えに来てくれた。背が高く、穏やかな光をたたえた青い瞳が印象的な青年だ。落ち着いた雰囲気の人に、私は一目で好感を持った。彼は私たちをソラク山国立公園に案内してくれた。ソラク山は韓国一の名山だ。見上げると、中空に雲を漂わせ、切り立った岩肌に深緑の木々が映える。神々しいと言う言葉が自然に浮かんでくる。

言葉の通じない二人をフミ子がつないでくれたから、私はあまり緊張しませんでした。

私たちはロープウェイでソラク山の展望台へ上り、更に頂上を目指した。ハイキングコースだが道は険しく、息が切れた。マイクはいつも先を歩き、危ない場所では、さっと手を貸してくれた。

やつとたどり着いた山頂からの景色に、私は思わず声を上げた。真下にはいくつもの奇岩と深い渓谷に流れ落ちる滝が見えた。その墨絵のような景色の彼方には、ソクチョの近代的な街並と大小二つの湖、更にその向こうには青い日本海が広がる。雄大な景色を前に久しぶりに気持ちが晴れ、思い切つて来てよかったと心から思った。

山を下りた私たちはソクチョ市の海鮮市場で夕食をとった。イカやエビの塩焼き、ピリ辛のたれをつけて食べる白身魚の刺身など、どれもがとびきり新鮮だった。マイクは一日中、私たちに辛抱強くつきあってくれ、保護者みたいに優しくかった。おかげでリラックスでき、気がつけばずっと笑っていた

帰りがけにマイクが自分のアパートでお茶を飲もうと誘ってくれた。市内の高台にあるアパートの一室はシンプルで清潔に整えられていた。私が疲れているように見えたのだろう。彼は窓辺にある白木のロッキングチェアをすすめてくれた。ポーナスをはたいて買ったという北欧製のそれは、しっかりした作りで実に座り心地がよかった。ゆっくりと揺れるいすに身を預け、星空を眺めているうちに私はすーっと寝入ってしまった。心がとけていくような心地よさ。ふと気づくと、体の上にバスタオルがかけてあり、トランプにでも興じているのか、二人の楽しげな笑い声が聞こえてきた。私が目覚めたのに気づいたフミ子が冷たい水を持ってきてくれ、それを少し飲み、コップを返すとまた眠ってしまった。次に目覚めると、フミ子がクスクス笑いながら言った。「よく寝ていたねえ。いびきかいていたわよ」驚いて時計を見ると、もう十一時を回っていた。なんと、私は初めて会った、言葉もよく通じない人の部屋で、三時間近くぐっすり眠っていたのだ。

あの旅から十数年がたった。雄大なソラク山も忘れられないが、一番の思い出は揺りいすの上でのまどろみだ。不眠に悩まされていたのに赤ん坊みたいに無心に眠ってしまった。思い出す度に、とても幸せな気持ちになる。

ソクチョへの旅は、私に生きる自信を取り戻すきっかけを与えてくれた。マイクとフミ子には心から感謝している。

心が疲れたとき、ふとよみがえるのはあの窓辺の揺りいすだ。がっしりとした作りの白木のいす、それは今も私の心の中でゆっくりと静かに揺れている。